



実験データに基づく『風格』試論 —「軽井沢の山荘」を例にあげて—

K03142 安原賢司

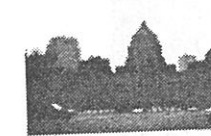
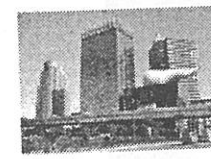
序章 研究背景と目的



「美しい景観を創る会」が発表した「悪い景観 100 景」(資料 1 参照)のなかで、建築による景観の破壊が 26 件 (全体の 37%) を占める。その全ては近代建築 (ビル、マンション、工場など) によるもので、前近代建築 (伝統的建築、集落など) は逆に良い評価がなされていた。



本研究では、近代/前近代建築の差異を『風格』(同意語: あじわい、趣) とし、なぜ印象評価において近代建築より前近代建築のほうが優勢なのかを、『風格』という言葉を紹介して考察する。



資料 1

第 1 章 実験 1 (オープンキャンパスでのアンケート)

1-1 動機

建築についての知識の希薄な一般人、高校生が多数集まる、本校におけるオープンキャンパスを利用し、アンケート調査を実施する。

1-2 研究方法



資料 2

アンケートを作成する際、実験者の恣意性をなくすため実験対象は CG で作成した既存の建物を用いる。建物は「住宅であること」「孤立した建物であること」「図面があること」「近代/前近代建築の要素が含まれていること」から、吉村順三作「軽井沢の山荘」(資料 2 参照)を選定した。

また建築の表層を決定する要素を「形態」「素材」「経年劣化」とし、各要素を操作した CG を素材 3 種類、形態 2 種類、経年劣化 2 種類の計 12 個 (資料 3 参照 以後①~⑫と表す) 用意し、アンケート調査を行う。

指導教員 伊藤 洋子 教授

		木	レンガ	モルタル
傾斜屋根	劣化前	①	⑤	⑨
	劣化後	②	⑥	⑩
陸屋根	劣化前	③	⑦	⑪
	劣化後	④	⑧	⑫

資料 3

1-3 アンケートの質問事項

近代建築の性質は「地域性」「時間性」の排除であった。よって近代/前近代建築について考察する際、有効なヴォキャブラリーは「地域性」「古さ」であり、かつ本実験では「好印象」を加えた 3 点を質問事項とする。以下は実際に用いた質問事項である。

- 問 1
- ・性別をお答えください。
 - ・年齢をお答えください。
 - ・建築の教育を受けたことがありますか。
 - ・建築や町並みに関心がありますか。

- 問 2 それぞれの建物において
- ・古い順に 1~12 の番号をつけて下さい。
 - ・好印象の順に 1~12 の番号をつけて下さい。
 - ・日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカのうち、建っている事がイメージできる地域に○をつけて下さい。(複数回答可)

1-4 実験実施日と被験者

実施日 2006 年 8 月 7 日 芝浦工業大学大宮キャンパス
被験者数計 101 名 詳しくは表 1 参照

表 1

	0~15歳	16~20歳	21~25歳	26~30歳	31~35歳	36~40歳	41~45歳	46~50歳	51歳~	計
男性	0	51	13	0	0	0	1	0	2	67
女性	0	23	6	0	0	0	2	3	0	34
計	0	74	19	0	0	0	3	3	2	101
教育あり	0	6	19	0	0	0	1	0	0	26
教育なし	0	68	0	0	0	0	2	3	2	75
計	0	74	19	0	0	0	3	3	2	101
関心あり	0	70	19	0	0	0	3	3	0	95
関心なし	0	4	0	0	0	0	0	0	2	6
計	0	74	19	0	0	0	3	3	2	101

1-5 なぜこの実験が可能であったか

実験 1 は結果に明確な傾向が現れたため、実験はある知見を得たという点で成功した。しかしそれは同時に、なぜそれぞれ異なる考えを持っている人々が同じような見解を持つのか、という疑問を生み出した。

このことから、被験者は建築の印象評価をする際、実際に自らが経験して得た現実的なイメージ以上に、事実かどうかは定かではない伝聞、情報などによる観念的なイメージが存在することが推定できる。

1-5-1 「古さ」について

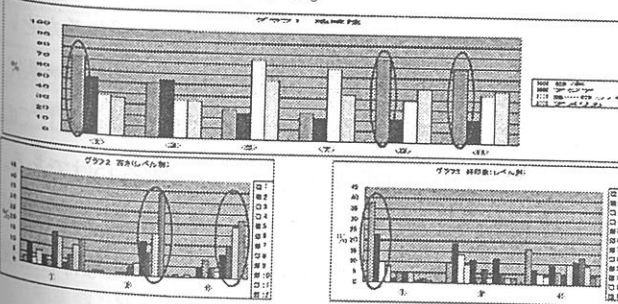
経年劣化 (②④⑥⑧⑩⑫) は「古さ」を表すが、それ以外 (①③⑤⑦⑨⑪) についての「古い」という評価は、事実としてあるわけではないので、観念的なイメージによってもたらされたものであるといえる。

1-5-2 「地域性」について

アジア、ヨーロッパ、アメリカに存在する全ての建物を実際に見ることは現実的には不可能なため、それらのイメージは伝聞、情報による観念的なイメージであり、逆に日本については、多くの建物を現実として経験しているため、それは現実的なイメージによるところが大きいといえる。しかし「過去の日本」は伝聞、情報の世界なので、観念的なイメージによるものである。

1-6 集計結果より考察

グラフ 1 より、(経年劣化後を除く)①⑨⑪は日本の印象が強い。グラフ 2 より「古さ」において、①は「古く」かつ「新しい」であるから現実的なイメージと観念的なイメージがともに存在し、⑨⑪は「新しい」であるから現実的なイメージが存在するといえる。つまり①は「昔から日本にあるから日本的」(前近代建築)であり、⑨⑪は「今日日本にあるから日本的」(近代建築)であるといえ、グラフ 3 より前者は好印象を生み、後者は印象が散漫としていることがわかる。



1-7 小結論

以上の考察から得た知見は以下の通りである。

近代建築 = 現実的なイメージ (新しい/現在の日本) → 不明確な印象
前近代建築 = 現実的なイメージ (新しい/現在の日本) + 観念的なイメージ (古い/過去の日本) → 好印象

序章において、近代建築と前近代建築の差異を『風格』と定義したわけであるから、以上の考察により『風格』とは観念的なイメージということになる。つまり、風格ある建築とは、古くから日本にあり、良い印象をもたらす建築であると推定できる。

1-8 追実験・考察の動機

- 観念的なイメージが印象評価にどのような影響を及ぼすかを調査するため、観念的なイメージが乏しいと思われる幼稚園児を対象にアンケート調査を行う。→ 2 章
- 現実的/観念的なイメージの両性格について、深い考察を試みる。→ 3 章
- 「経年劣化」は「古い」という実験者の意図が現れてしまったため考察の対象外となったが、逆に言えば「経年劣化」は他の要素から遊離した「記号」として扱われたということでもある。そうした記号として構成された建築の表層は、印象評価においてどのような意味を持つかを考察する。→ 4 章
- 『風格』という言葉の意味を、近代/前近代建築の差異と規定したが、一般的な社会においてはどのような意味を持ちうるのかを考察する。→ 5 章

第 2 章 実験 2 (幼稚園児を対象としたアンケート)

2-1 研究方法と被験者

保母さんをなさっている同研究生の母親にお願ひし、幼稚園年長組 (5~6 歳) 23 名を対象に建物①③⑤⑦⑨⑪のなかでどれが一番好きかを訊いてもらひ、それぞれ感想を訊いていただいた。

2-2 集計結果より考察

結果 (資料 4 参照) より、観念的なイメージが乏しいと思われていた幼稚園児も、TV や絵本などから得たであろう強い観念的なイメージを抱いており、そして実験 1 と同様、観念的なイメージは好印象を生み、逆に現実的なイメージが強いほど、評価は悪くなった。

建物 数	建築的なイメージ		非建築的な イメージ	評価
	現実的なイメージ	観念的なイメージ		
⑨	9	・空の家みたい ・宇宙ステーション にみえる		・電気が明るくて すごい
①	5	・寂こみえる		・煙突が格好いい ・部屋が明るくていい ・カッコいい家こみえる ・壁がカッコいい
⑤	3	・寂こみえる ・普通の家にみえる		
⑦	3	・煙突の家にみえる ・屋上みたい	・船こみえる	
⑪	2	・寂こみえる ・アパートにみえる ・小さいホテル	・四角いきの こみえる ・ラジコン	
③	1	・寂こみえる ・家を売っているところ の家みたい		・もうすごい大きいとい

資料 4

2-3 小結論

観念的なイメージが好印象を生むという、実験 1 で得た知見の有意性が確認できた。

第 3 章 現実的／観念的なイメージの現象学的考察

3-1 フッサールの現象学

現象学とはエドムント・フッサール (1859~1938) によって提唱された学である。フッサールは、あらゆる事象が、数量化された近代的世界観に隠蔽されているという。

例えば「時計」は時間を知るための便利な道具として開発されたが、現代社会においては時計の示す時間がわれわれの生活を規定し、時間が所得を生み、自由な時間は幸福を生む。つまり、本来便利な道具であった時計が示す時間が、われわれが潜在的に持っていた世界観、価値観、幸福感を隠蔽しているとフッサールは言うのである。そうした隠蔽された本来的な世界を考察するには、理念的な数量化された世界観 (=客観的世界) を意識的に停止 (=エポケー) し、直接経験できる確かな事象に焦点をあてる必要があるという (この作業を現象学的還元という)。

例えば「ル・コルビュジエは 1887 年にスイスで生まれた」という事実がある。しかし、それは情報・伝聞によるものであり直接経験できない不確かな事象 (=ドクサ) であるから、現象学的還元においてはエポケーされなければならない。

ではわれわれの目の前にあるモノは確かであろうか。例えば、ある空間に机があり、それに付随する椅子に座っているとき、われわれはここに「机がある」と確信し、机の存在を直接経験しているように思われる。しかし、実際われわれから見えるのは、「机」ではなく机の「板の表面」だけである。もちろん、われわれが抱く「机」と

いう存在は決して「板の表面」だけでなく、「板の裏面」「引き出し」「脚」などさまざまな要素で構成されているが、それらを同時に見る (つまり直接経験する) ことは事実上不可能であるから、われわれの目の前にある「机」もドクサということになってしまう。

しかし、「ル・コルビュジエは 1887 年にスイスで生まれた」はドクサであるから嘘かもしれないが、目の前にある「机にみえるモノ」が「机」ではないといわれても、われわれはどうしても納得ができない。理論的にはドクサかもしれないが、われわれの日常においては、それは疑えない事象として残るのである。

つまり、現象学的還元において絶対確実なことは、われわれは「机にみえるもの」を「机」として確信することである (なぜなら、それができなければ、われわれの日常生活は成り立たないからである)。つまり、フッサールは現象学的還元を行うことで、不確かな世界観をエポケーし、われわれが現在接している日常 (=生活世界) に焦点を当てることで、世界を問い直すことを試みたのである。

3-2 ハイデッガーの「世界・内・存在」

先の現象学的還元において、「机にみえるモノ」を「机」として確信することが絶対確実なことであったが、実際それは無意識的な行為である。ではなぜ意識的に「机」と確信しなくても、われわれは机を「机」として扱えるのか。それは、もともと事物があり、われわれがその存在を認識するのではなく、われわれが何かに関心を抱いたとき、あらゆる存在は「世界・内・存在」として初めて現れるからであると、現象学の継承者マルティン・ハイデッガー (1889~1976) は説く。

例えばノートを広げるのに「適度な大きさの机」で学習しているとしよう。学習しているとき、突如地震が起きると、われわれは机の下に隠れるであろう。その際、隠れるのは机でなくてもよいが、なぜ机に隠れるかというと、われわれが机に対し「頑丈な防御になる」と関心を抱くからである。そのとき、その机は「机」としての存在が消え、「頑丈な防御」として存在するわけである。しかし自分の体より机が小さいと、その机は「頑丈だが小さすぎる防御」として関心を持たれ、新たな存在を現すことになる。

以上の工程において、机は物質的、数量的には一切変

化していないが、われわれは机に新たな関心を抱くたびに、机は大きさや強度といった性質を変化させ、新たに存在を現す。そしてそれは「ノート」「学習」「地震」「体の大きさ」など、さまざまな存在の連帯性 (=意味連関) の世界の内での存在「世界・内・存在」なのである。

3-3 小結論

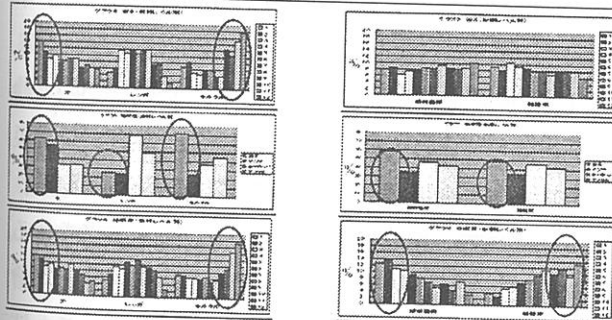
現実的なイメージは直接経験できる事象であるが、観念的なイメージは直接経験できないドクサであるから、それは数量化された理念的な存在であるといえる。つまり、近代建築の表層における印象は、それぞれ個人の関心による意味連関のなかで、その都度現われ出る存在であり、逆に前近代建築はそういった存在の仕方以外に、われわれ誰もが共有できる近代合理主義的、かつ理念的な存在でもあるといえる。

第 4 章 建築の表層における記号についての考察

4-1 研究方法

実験 1 で得られたデータを「木」「レンガ」「モルタル」「傾斜屋根」「陸屋根」について、それぞれ分離させて考察する。

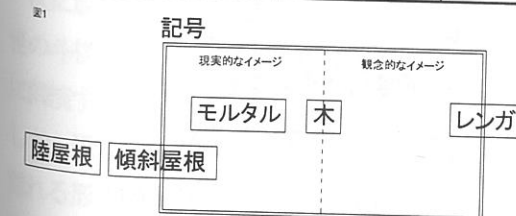
4-2 集計結果から考察



グラフ 4~9 のデータを基にそれぞれの評価が何に起因するかを考察すると、下記の表 2、図 1 のようになる。

	古さ	増減性	好印象
木	観念的なイメージ (「古」)	現実的なイメージ (「日本的」)	良
レンガ	ナシ	観念的なイメージ (「古」)	ナシ
モルタル	現実的なイメージ (「新しい」)	現実的なイメージ (「日本的」)	悪
傾斜屋根	ナシ	現実的なイメージ (「日本的」)	良
陸屋根	ナシ	ナシ	悪

表 2



以上のことから、素材については観念的なイメージは好印象を生み、現実的なイメージは印象がよくなく、そして素材について印象ナシ (=記号の希薄) は印象そのものを与えなかった。また形態については、互いの記号が希薄しているなかで、「地域性」における現実的なイメージの差が、評価に大きく影響したといえる。

4-3 小結論

観念的なイメージが好印象を与えるということがわかるが、それはあくまで二義的なものであり、なにより重要なのは明確な記号が存在していること (=「わかる」「知っている」) が好印象、もしくは印象そのものを生み出すということである。

第 5 章 『風格』という言語について

5-1 『風格』について語りえるならば

『風格』という言語について明確な意味は存在しないが、「風」で始まる言語を調べると①固有の場所性、④古い、⑤好印象という意味が多数見つかった。以上の考察よりそれは①=観念的な「地域性」、⑤=観念的な「古さ」となり、また好印象 (=⑤) を生んだのは観念的なイメージであるから、『風格』とは第 1 章の小結論同様、観念的なイメージということが推測できる。

5-2 『風格』について語りえないならば

『風格』という言語は建築との関連性の中で、厳密に定義することはできないが、われわれは日常生活において建築を評価する際、『風格』という言語を何不自由なく遣う。つまりそれは、『風格』という言語が建築そのものに依拠せず、建築を取り巻く社会において成立する言語であるといえる。

第 6 章 結びにかえて

近代建築と前近代建築の差異「風格」とは、近代が生み出された数量化された理念的な存在である。そしてそれは社会における記号であり、建築そのものの内面的資質とは無関係であるが、明確な記号を示すがゆえに、人々を安心させ、良い印象を促すのである。

参考文献

- ・『現象学入門』 ロラン・バルト 著 運賃重彦・杉本紀子 訳 筑摩書房
- ・『消費社会の神話と構造』 ジャン・ボードリヤール 著 今村仁司・塚原史 訳 紀伊国屋書店
- ・『小さな森の家 岐阜県山田町』 吉村真三 著 建築資料研究所
- ・『存在と時間 (上・下)』 マルティン・ハイデッガー 著 細谷貞雄 訳 ちくま学芸文庫
- ・『現象学入門』 竹田青嗣 著 NHKブックス
- ・美しい景観を創る会ホームページ

http://www.utsukushii-keikan.net/10_worst100/worst.html